

「セミはなぜ鳴くのか」という謎は、古来さまざまな人をひきつけてきた。

ファーブルは、毎年オオナミゼミやトネリコゼミを観察しているうちに、朝から夕暮れまでひたすら鳴き続けているセミが何のために鳴いているかを考えるようになった。これは雄が相手を誘う「恋のカンタータ」なのだろうか。しかし、セミの雄たちは、雌がすぐそばにいるにもかかわらず、ずっと鳴き続けている。そもそもセミには音が聞こえていないのではないか。ファーブルは試しに村役場の大砲を借りてきて、空砲を鳴らし、セミがどう反応するかを見た。耳をつんざくような音が鳴り響き、セミは平然と鳴き続けた。セミはなぜ鳴くのか。彼らは「自分が生きていると感じる喜びだけから、そのやかましい器官を振動させているのだ、自分の出している音には無関心なのだ」（完訳ファーブル昆虫記第5巻下／奥本大三郎訳 集英社）とファーブルは記している。

では本当に、セミの鳴き声は交尾とは関係ないのだろうか。その後、動物学者たちがさまざまなセミの解剖や観察を行った結果、セミは音声をきく器官を持っており、多くの種で雄の鳴き声は交尾前の行動となっていることがわかってきた。たとえばあるセミでは、雄の鳴き声の高さ（周波数帯）によって、雌が遠くから引きつけられてやってきて、近くに来ると今度は、雌は雄の歌のパターンによって、相手が自分と同じ種かどうかを見分ける。種によっては、雌も音を出すことが知られている。雄の鳴き声に対してタイミングよく羽を打ち鳴らして、交尾できることを合図するのである。

ファーブルの観察したオオナミゼミやトネリコゼミでは、まだ鳴き声と交尾にどのような関係があるのか、確たる証拠はあがっていない。しかし大砲の音とセミの声とでは周波数も歌の時間構造もまるで違う。大砲に動じなかったからといって、セミが自分たちの声を聞き分けていないということにはならないだろう。ファーブルの気づかなかった新しい発見が、将来明らかになるかもしれない。

セミに限らず、さまざまな動物で、雌雄が交尾をする前になにかしら型にはまった行動が見られることがある。これはしばしば「求愛」行動と呼ばれる。同様に、交尾前に異性をひきつけようと発する声のことを「求愛ソング」と呼ぶことがある。ただし、これらはごく擬人的な表現で、実際の動物が人間の「愛」に対応する考えや情動を持っているということではない。TVの動物番組などを見ると、「求愛行動」をとらえた映像にピンクのハートのマークが描かれていたり、それらしい猫などで声のナレーションがつけられていたりするけれど、これらもまた人間の勝手につけた解釈に過ぎない。こうした行動を学術的に研究するとき、英語では「愛 love」ということばは使わずに courtship とか mate ということばを使う。あえて訳すとすれば「交尾前行動 courtship behavior」とか「配偶行動 mating behavior」ということになる。なんとも「愛」のない、そっけない言い方だけれど、わたしは、この非人情な呼び名が、人間以外の動物の、人智をこえた行動を考えるとときには合っていると思う。

\*\*\*

京都芸術センターの展覧会「つながりの方程式」で前田耕平の展示「Love Noise」を見た。

前田は、セミの求愛の鳴き声にインスピレーションを得て、人に声を出してもらうことを思いついたのだと言う。まず前田自身が参加者を市井の人々から募る。集まった人たちにそれぞれ「愛」ということばから連想されることをカード<sup>1</sup>に書いてもらう。そのあと、校庭の一角で一斉に声を出してもらう。このとき、声は具体的なことばではなく、ただ「あー」という母音である。「愛」にまつわる発音はさまざまであるはずだが、参加者たちのほとんどが「あ」の音を自発的に選んだところが興味深い。それは口を大きく開けることを誘う一方で、子音を欠くことによって音の始まりをあいまいにする。その結果、声は、区切れ目のあいまいな響きとなって校舎に反響する。声明に似ていないこともないが、声明がもっぱら男性の僧侶によって発せられるコーラスであるのに対し、集まった人々はさまざまな性や年齢層の人々であり、そこに含まれる声もバラエティに富んでいる。そのおかげで、1人1人の声が時間のところどころで浮き立つように聞こえ、集まりのようでも個のようでもある。声は校舎の壁からはね返ってくるので、人々は声を発する一方で、自然と集まりの声の中で浮き沈みする自分の声に聞き入ることになる。おもしろい響きの試みだ。

気になったのは、「Love Noise」とはいうものの、いずれの人の声も丸みを帯び、いわゆるノイズや叫びというよりは、柔らかい発声であったことだ。それは、事前に「愛」に関する質問がなされていたせいだろう。「愛」というあいまいだがロマンチックなことばについてひととき考えさせられ、声を出す。人々はそのことで、「愛」に関する声を意識することになっただろう。それは校舎の壁にはね返って声の発し手自身の耳に届き、どこかしら甘美な感覚をもよおさせただろう。

「Love Noise」の声のあいまいさ、甘美さは、偶然の産物ではない。声は手書きのメッセージを貼り付けた屋台を使って作者自身が見知らぬ人々を募ったこと、その集まりに「LOVE」というキーワードが冠せられていたこと、そして事前に「愛」についての簡単な質問が設えられていたことゆえに発せられた。この柔らかな声の試みは、つまるところ誰が誰に宛てたできごとなのだろうか。少なくとも、かつて動物行動学を学び、人間以外の動物の鳴き声に「愛」よりも非人情さをきいてきたわたしは、これらの声のよき受け手ではなかった気がする。

2020年3月、コロナウイルス問題によって、わたしたちは集まりの中で声を出し合うことをためらわされている。作者の意図したことはないだろうけれど、この「Love Noise」は、そうしたことが可能であった時間の記録にも見えてくる。

細馬宏通（早稲田大学文学学術院教授）

※本寄稿は、展覧会「つながりの方程式」における前田耕平の作品「Love Noise」についての論評です。

---

<sup>1</sup>：前田から参加者への質問：あなたが「愛」を感じたこと、またはあなたが「愛」だと思うことをカードにお書きください。